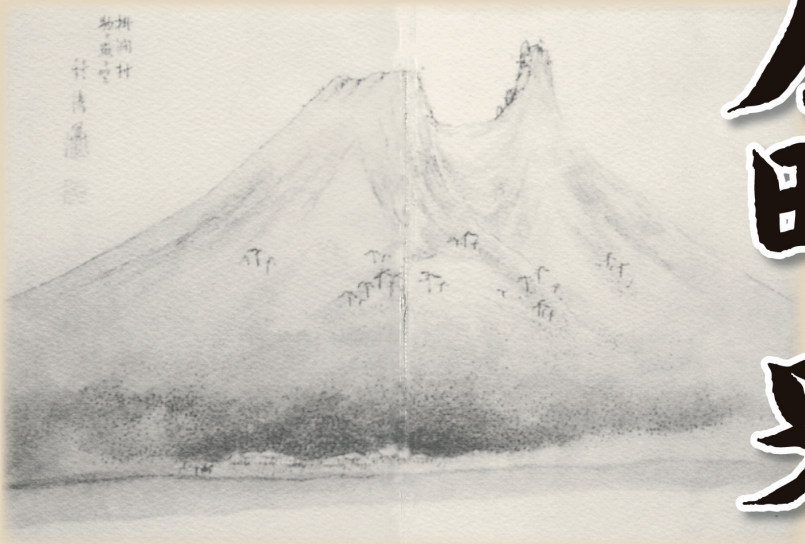
砂原町史



第一巻　通説編

町章

大正６年10月24日制定

町の木／オンコ

町の花／ツツジ

町の鳥／カモメ

昭和55年11月22日指定

砂原町民憲章

わたくしたちは　秀峰駒ヶ岳を仰ぎ　幸多い
内浦の　海と　緑と　太陽　に恵まれた砂原町
の町民です。
　わたくしたちは　先人の心と汗をうけつぎ
責任と自覚をもって　豊かで明るい町をつくる
ため　この憲章を定めます。

一、互いに話し合い、温かい家庭の育つ
　　平和な町にしましょう。
一、元気に働き、産業の盛んな
　　豊かな町にしましょう。
一、スポーツに親しみ、心身をきたえ
　　健康な町にしましょう。
一、きまりを守り、健全で住みよく
　　明るい町にしましょう。
一、郷土を愛し、教養と文化を高め
　　美しい町にしましょう。

（昭和55年11月22日制定）

風土・位置・地形

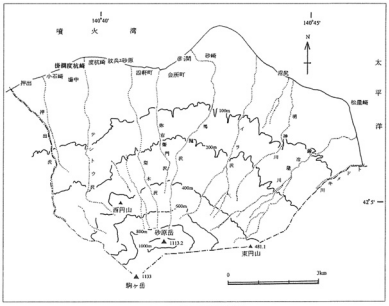
砂原町は、北緯四二度、東経一四〇度にあり、南北に約八キロメートル、東西約一一キロメートルの中にある。太平洋・内浦湾（別名、噴火湾）に面する漁業を主とする水産業の町である。

その位置は、南北に長い日本列島の北に位置する北海道の南部、渡島半島にあって、室蘭市・地球岬と向かい合って内浦湾を抱くように砂原町・砂崎と湾口を形成している。

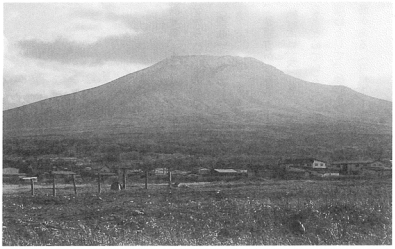
「噴火湾」とは、イギリスの探検船プロビデンス号、船長ブロートンによって今から二〇〇年前に命名された「VOLCANO-BAY（ボルカノベイ）」を、そのまま「噴火湾」と日本語訳したものであることは言うまでもない。

内浦湾の湾口に、この湾のシンボルとして聳えているのが、活火山「駒ヶ岳」である。

砂原町の自然は、南にこの秀峰駒ヶ岳をいただき、北に波静かな豊饒の海、内浦湾と太平洋を抱くようにのびる海岸線をもつことにその特徴が表れている。



砂原町の地勢


砂原町から見た駒ヶ岳

「駒ヶ岳」とは、山全体に冠された総称であって、即ち、主峰「剣ヶ峰一一三三メートル」と「砂原岳一一一三メートル」の二峰に「馬の背」と呼ばれる火口原と、そのはずれにある「隅田盛」と呼ばれる高みからなる活火山である。山体は噴出した溶岩を主体とする二つの岩峰と、火山灰により形成された柔らかい曲線を描く尾根と雪解け水や雨水による浸蝕によって作られた雨裂と呼ばれる深く切れ込んだ谷によって形成されている。

温帯降雨林帯に属する日本では、山には必ずと言っていいほど渓谷が発達し河川が流れているが、ここ駒ヶ岳、砂原岳では河川と呼べるような大きな水流は見当たらない。しかし、「駒ヶ岳」に降った雨や雪解け水は火山灰地に吸い込まれ伏流水となっていてこれらが山の中腹に滲み出して小さな流れとなって海へ注いでいるところもある。砂原町では山が急峻なため大きな池などは形成されず、かつて海岸近くにあった池は公園の造成により跡形もなくきえてしまった。

山麓では、植林事業を中心とする治山工事がこの火山灰地に営々と続けられ現在もなお絶え間なく努力が続けられている。このため赤茶けて荒ぶれた砂原岳、剣ヶ峰の頂上部とはうって変わって中腹以下ではトドマツ、カラマツ、ハンノキなどの苗木が植林されている。植栽された樹木はよく茂り、その下には豊かな植物群落が成長している。そしてその樹木を始めとする植物の種子が風や動物によって運ばれて、上へ上へとその勢力を赤茶けた山肌へ登らせている。

砂原町市街地は、この砂原岳の北斜面がその裾を静かに横た

わる内浦湾に浸す海岸に沿って細長く、ゆるい弧を描きながら東から北西に伸びている。しかし、この静かな風景も、一九九六年三月、突然の小噴火で消し飛んでしまったことは記憶に新しい。

駒ヶ岳は有史以来しばしば噴火を繰り返し、時には噴火による大津波に内浦湾沿岸の住民を恐怖と絶望のどん底に陥れている。大噴火は甚大な被害を及ぼすが、また一方では膨大な溶若と火山灰を地上に残した。人々ほ今は資源としてこれを活用し自然の恵みとして享受しているところである。

海岸線は、東半分は溶岩台地が直接海に入り込み岩を噛む太平洋の波に洗われ、北側は豊富な火山灰とはるかに潮流に運ばれてきた漂砂によって形成される砂浜となり波静かな内浦湾となっている。この自然最観と豊かな水産物がここの人々に多くの幸をもたらし生活を支えていることはいうまでもない。

この二つの特徴ある景観を結ぶところが砂崎である。この砂崎は、太平洋と内浦湾の二つの海が作り出した砂州で、その上には広大で平らな牧場を乗せている。砂州の先端には砂崎灯台がありこの砂でできた岬のシンボルとなっている。

植物

駒ヶ岳の裾野に噴火湾に面して広がる砂原町は、潜在的にはブナ-チンマザサ群落が分布する地域と考えられる。ブナは、新生代第三紀の中新世には北海道に広く分布していたが、気候が寒冷化するに従って一度は北海道から姿を消した。しかし、氷河期が終わると再び北上を開始し、およそ五千年前には北海道の南端から分布を広げて現在に至っている。耐雪性に富み、空中湿度の高い、肥沃な土壌を好む樹木である。駒ヶ岳の周辺では、大沼湖畔には直径が七〇センチメートルを越えるブナが生い茂っているし、赤井川方面の軽石流地帯の標高二五〇メートルあたりでも、直径が一五～二〇センチメートルほどの若いブナの林がまばらに広がっている。しかし、北斜面の砂原町ではブナが見あたらない。これはどうしてなのだろうか。

今から約一万年くらい前から、駒ヶ岳は頻繁に噴火を繰り返すようになる。約三千年前の噴火の後、駒ヶ岳の火山活動は歴史時代にはいるまでしばらく沈静化したが、一六四〇年、駒ヶ岳は大噴火し、山体は崩壊、クルミ坂岩屑なだれ堆積物を山麓に押し流した。このとき噴出した火山灰は、砂原町を二メートルも覆っている。噴火と同時に山腹を駈け下った軽石流は厚さ五メートルもあり、この中にはミズナラなどの炭化木が数多くみつかっている。このことから、当時の砂原岳山麓には、ミズナラを中心とした広葉樹の森が広がっていたと考えられるが、噴火によって壊滅的な被害を被ったであろう。

ところで、ブナは、日射や葉温が増加して水ストレスが高まると、光条件に見合うだけの光合成速度が得られず、光合成速度の日中低下を引き起こす。ことに苗木は、ミズナラに比べて水不足に対して一層敏感である。また、ブナは開葉を迎える五月初旬におそ霜にあうと枯死することが多い。ミズナラの開葉はブナより十日は遅れるので、霜の影響を受けることはない。繰り返された噴火のたびに、砂原町全域を覆った粒の粗い火山放出物の未熟土に加えて、冬期の最深積雪六〇センチメートル以下という乾燥条件やおそ霜が、ブナの進出を阻んだのではな

いだろうか。現在の砂原町には、ブナクラス域の代償植生であるクリ-ミズナラ群落が広がっている。

一九二九年の大噴火の時も、軽石流の流下による森林や耕地の埋没、降下軽石による草木の焼失、降雨によって引き起こされた泥流による被害などで植生は荒廃したが、裸地化した被災地への陽樹の進出に加えて、繰り返された植林の努力によって、砂原町は今、緑豊かな町に成長しつつある。

〈砂原町〉植物総目録

Aシダ植物

ヒカゲノカズラ科　ヒカゲノカズラ・アスヒカズラ・ホソバトウゲシバ

トクサ科　スギナ・トクサ・イヌスギナ

ハナヤスリ科　エゾフユノハナワラビ・ナツノハナワラビ

ゼンマイ科　ヤマドリゼンマイ・ゼンマイ

キジノオシダ科　ヤマソテツ

コバノイシカグマ科　オオレンシダ・ワラビ

ミズワラビ科　クジャクシダ・イワガネゼンマイ

チャセンシダ科　コタニワタリ・チャセンシダ

シシガシラ科　シシガシラ

オシダ科　リョウメンシダ・シラネワラビ・オシダ・ミヤマベニシダ・ナライシダ・サカゲイノデ・ジュウモンジシダ

ヒメシダ科　ミヤマワラビ・ミゾシダ

メシダ科　エゾメシダ・ヤマイヌワラビ・シケチシダ・オオメシダ・ハクモウイノデ・ミヤマシケシダ・イヌガンソク・クサソテツ・コウヤワラビ・イワデンダ

ウラボシ科　ミヤマノキシノブ

B種子植物

1裸子植物

マツ科　トドマツ・カラマツ・アカマツ・チョウセンゴヨウ・クロマツ・ドイツトウヒ・ヨーロッパアカマツ

スギ科　スギ

ヒノキ科　ヒノキ

イヌガヤ科　ハイイヌガヤ

イチイ科　イチイ

2被子植物

（1）双子葉植物

①離弁花類

クルミ科　オニグルミ

ヤナギ科　ウラジロバコヤナギ・ドロノキ・ヤマナラシ・ヤマネコヤナギ・イヌコリヤナギ・エゾノカワヤナギ・ミネヤナギ・オノエヤナギ・キツネヤナギ

カバノキ科　ケヤマハンノキ・ミヤマハンノキ・ヒメヤシャブシ・ダケカンバ・ウダイカンバ・シラカンバ・サワシバ・アサダ

火口原に進出した緑

ブナ科　クリ・カシワ・ミズナラ・コナラ

ニレ科　ハルニレ・オヒョウ・ケヤキ

クワ科　カナムグラ・カラハナソウ・ヤマグワ

イラクサ科　メヤブマオ・アカソ・ウワバミソウ・ムカゴイラクサ・アオミズ・コバノイラクサ・エゾイラクサ

ヤドリギ科　ヤドリギ
タデ科　ウラジロタデ・ミズヒキ・ヤナギタデ・オオイヌタデ・イヌタデ・タニソバ・ヤノネグサ・ボントクタデ・ママコノシリヌグイ・アキノウナギツカミ・ミゾソバ・ミチヤナギ・オオイタドリ・スイバ・ヒメスイバ・ナガバギシギシ・エゾノギシギシ・ハイミチヤナギ
スベリヒユ科　スベリヒユ
ナデシコ科　オオバナノミミナグサ・オランダミミナグサ・オオミミナグサ・ミミナグサ・ナンバンハコベ・エゾノカワラナデシコ・オオヤマフスマ・ツメクサ・ハマツメクサ・ムシトリナデシコ・ウスベニツメクサ・ウシハコベ・ミドリハコベ・ミヤマハコベ・カラフトホソバハコベ・マツヨイセンノウ・ホザキマンテマ・マンテマ・ノハラツメクチ
アカザ科　ハマアカザ・シロザ・アカザ・オカヒジキ
ヒユ科　イノコズチ・イヌビユ・ホソアオゲイトウ
モクレン科　ホオノキ・キタコブシ
マツブサ科　チョウセンゴミシ・マツブサ
クスノキ科　オオバクロモジ
カツラ科　カツラ
キンポウゲ科　エゾトリカブト・ルイヨウショウマ・サラシナショウマ・キツネノボタン・アキカラマツ・カラマツソウ・キクザキイチリンソウ・アズマイチゲ・コキツネノボタン
メギ科　ヒロバヘビノボラズ・ルイヨウボタン
アケビ科　ミツバアケビ
ドクダミ科　ドクダミ
センリョウ科　ヒトリシズカ・フタリシズカ
ボタン科　ヤマシャクヤク
マタタビ科　サルナン・ミヤママタタビ・マタタビ
オトギリソウ科　オトギリソウ・トモエソウ
モウセンゴケ科　モウセンゴケ
ケシ科　クサノオウ
アブラナ科　ミヤマハタザオ・ハマハタザオ・ナズナ・タネツケバナ・コンロンソウ・オオバタネツケバナ・ユリワサビ・ハナダイコン・ハマダイコン・イヌガラシ・スカシタゴボウ・カキネガラシ・ハルザキヤマガラシ
ベンケイソウ科　キリンソウ
ユキノシタ科　トリアシショウマ・ネコノメソウ・ヤマネコノメソウ・エゾアジサイ・ノリウツギ・ツルアジサイ・コマガタケスグリ・イワガラミ・ツルネコノメソウ
バラ科　キンミズヒキ・ヤマブキショウマ・ヤブヘビイチゴ・オニシモツケ・ノウゴウイチゴ・オオダイコンソウ・ダイコンソウ・エゾノコリンゴ・ヒメヘビイチゴ・ミツモトソウ・キジムシロ・エゾツルキンバイ・クロバナロウゲ・ワタゲカマツカ・ウワミズザクラ・チシマザクラ・エゾヤマザクラ・シウリザクラ・ノイバラ・ハマナス・クマイチゴ・ナワシロイチゴ・アズキナシ・ナガボノシロワレモコウ・ナナカマド・マルバシモツケ・エゾイチゴ・ミヤマザクラ
マメ科　ヤブマメ・ヌスビトハギ・ハマエンドウ・エゾヤマハギ・メドハギ・ミヤコグサ・イヌエンジュ・クズ・ニセアカシア・センダイハギ・タチオランダゲンゲ・アカツメクサ・シロツメクサ・ツルフジバカマ・クサフジ・ヒロバクサフジ・フタバハギ・コメツブツメクサ・エゾノレンリソ

ウ

カタバミ科　力タバミ・エゾタチカタバミ
フウロソウ科　ゲンノショウコ・エゾフウロ・イチゲフロウ
トウダイグサ科　エノキグサ・ナツトウダイ
ユズリハ科　エゾユズリハ
ミカン科　ヒロバノキハダ・ツルシキミ・サンショウ
ニガキ科　ニガキ
ウルシ科　ツタウルシ・ヤマウルシ・ヌルゲ
カエデ科　ハウチワカエデ・イタヤカエデ・ベニイタヤ・オオモミジ・ヤマモミジ
ツリフネソウ科　キツリフネ
モチノキ科　ハイイヌツゲ・ツルツゲ・アカミノイヌツゲ
ニシキギ科　ツルウメモドキ・コマユミ・ツルマサキ・ツリバナ
ミツバウツギ科　ミツバウツギ
ツゲ科　フッキソウ
ブドウ科　ノブドウ・ヤブガラン・ヤマブドウ
シナノキ科　シナノキ
ジンチョウゲ科　ナニワズ
グミ科　アキグミ
スミレ科　タチツボスミレ・オオタチツボスミレ・スミレ・ミヤマスミレ・スミレサイシン・ツボスミレ
ウリ科　ミヤマニガウリ・アマチャヅル
ミソハギ科　エゾミソハギ
アカバナ科　ウシタキソウ・ヤナギラン・イワアカバナ・ヒメアカバナ・アカバナ・メマツヨイグサ・オオマツヨイグサ・エゾアカバナ
アリノトウグサ科　ホザキノフサモ
スギナモ科　スギナモ
ウリノキ科　ウリノキ
ミズキ科　ミズキ・ハナイカダ
ウコギ科　コシアブラ・ウド・タラノキ・ハリギリ・トチバニンジン
セリ科　アマニュウ・エゾニュウ・シャク・ホタルサイコ・ドクゼリ・ミツバ・ハマボウフウ・オオハナウド・オオチドメ・マルバトウキ・セリ・ヤブニンジン・オオカサモチ・ウマノミツバ・ヤブジラミ・ノラニンジン・エゾノヨロイグサ

②合弁花類

イチヤクソウ科　ウメガサソウ・オオウメガサソウ・アキノギンリョウソウ・ベニバナイチヤクソウ・イチヤクソウ・ジンヨウイチヤクソウ
ツツジ科　コメバツガザクラ・イワヒゲ・シラタマノキ・エゾイソツツジ・ヒロハハナヒリノキ・コヨウラクツツジ・ナガバツガザクラ・ムラサキヤシオ・ハクサンシャクナゲ・ヤマツツジ・ミヤマホツツジ・ホツツジ・オオバスノキ
サクラソウ科　オカトラノオ・コナスビ・ハマボッス・ヤナギトラノオ・クサレダマ
エゴノキ科　ハクウンボク
モクセイ科　アオダモ・ヤチダモ・イボタノキ
リンドウ科　エゾオヤマリンドウ・フデリンドウ・ツルリンドウ

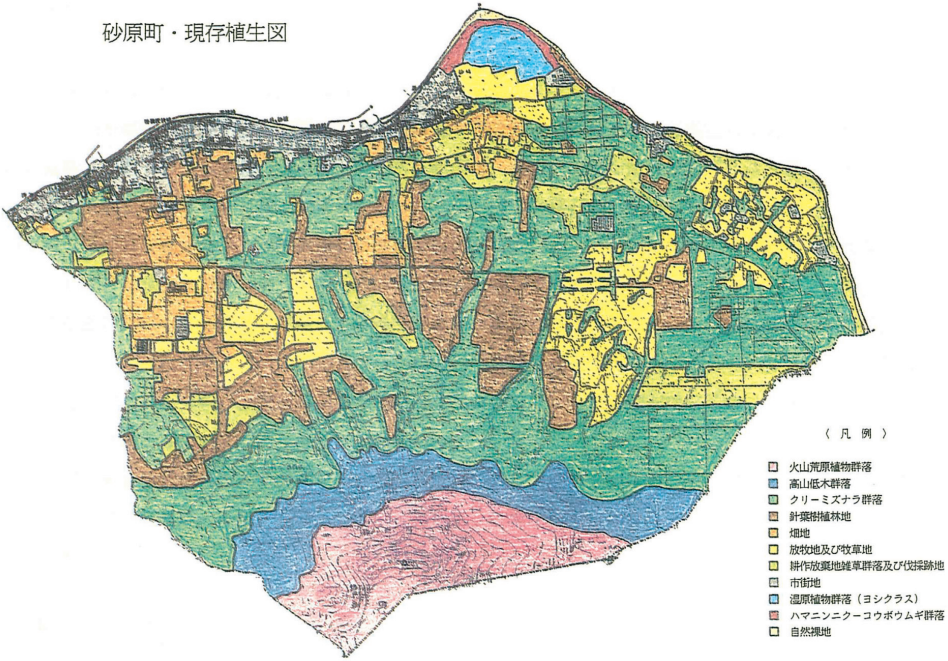
ガガイモ科　イケマ・ガガイモ
アカネ科　クルマバソウ・キクムグラ・ヤエムグラ・オककル
　マムグラ・クルマムグラ・キバナノカワラマツバ・ホソバ
　ノヨツバムグラ
ヒルガオ科　ヒルガオ・ハマヒルガオ
ムラサキ科　スナビキソウ・ヒレハリソウ・ハマベンケイソウ
クマツヅラ科　ムラサキシキブ
アワゴケ科　ミズハコベ
シソ科　ニシキゴロモ・ジャコウソウ・クルマバナ・ミヤマト
　ウバナ・ナギナタコウジュ・カキドオシ・オドリコソウ・
　エゾシロネ・ウツボグサ・イヌゴマ・ナミキソウ・ツルニ
　ガクサ・エゾタツナミソウ
ナス科　イヌホオズキ
ゴマノバグサ科　ウンラン・トキワハゼ・ミゾホオズキ・オオ
　バミゾホオズキ・イワブクロ・エゾヒナノウスツボ・タチ
　イヌノフグリ・オオイヌノフグリ・エゾクガイソウ
ハマウツボ科　ハマウツボ
ハエドクソウ科　ハエドクソウ
オオバコ科　オオバコ・エゾオオバコ・ヘラオオバコ
スイカズラ科　キンギンボク・エゾニワトコ・アラゲガマズミ・
　オオカメノキ・カンボク・ミヤマガマズミ・タニウツギ
オミナエシ科　マルバキンレイカ・オミナエシ・オトコエシ
キキョウ科　ツリガネニンジン・イワギキョウ・ツルニンジン
キク科　ノコギリソウ・セイヨウノコギリソウ・キタノコギリ
　ソウ・ノブキ・ブタクザ・ヤマハハコ・オトコヨモギ・ハ
　マオトコヨモギ・イヌヨモギ・オオヨモギ・シロヨモギ・
エゾノコンギク・エゾゴマナ・シラヤマギク・ミミコウモ
リ・モミジガサ・ヨブスマソウ・ヤブタバコ・チシマアザ
ミ・オオノアザミ・アメリカオニアザミ・コハマギク・ヒ
メムカシヨモギ・ヨツバヒヨドリバナ・ヤナギタンポポ・
コウリンタンポポ・カセンソウ・ニガナ・ジンバリ・ハマ
ニガナ・アキノノゲシ・ヤマニガナ・ヤブタビラコ・セン
ボンヤリ・トウゲブキ・コシカギク・アキタブキ・コウゾ
リナ・キヌガサギク・ハンゴンソウ・エゾオグルマ・ノボ
ロギク・アキノキリンソウ・オニノゲシ・ハチジョウナ・
ハルノノゲシ・ヒメジョオン・オヤマボクチ・エゾタンポ
ポ・セイヨウタンポポ・ブタナ・オオアワダチソウ・フラ
ンスギク・トゲチシャ・オオハンゴンソウ・ハナガサギク・
メナモミ・トキンソウ・ハキダメギク・コヤブタバコ・エ
ゾノキツネアザミ

（2）単子葉植物

オモダカ科　ヘラオモダカ
ヒルムシロ科　ヒルムシロ
ユリ科　ネバリノギラン・ギョウジャニンニク・キジカクシ・
　ホウチャクソウ・チゴユリ・キバナノアマナ・エゾゼンテ
　イカ・タチギボウシ・オオウバユリ・エゾスカシユリ・ク
　ルマユリ・マイヅルソウ・ツクバネソウ・クルマバックバ
　ネソウ・ヒメイズイ・ミヤマナルコユリ・オオアマドコロ・
　ユキザサ・サルトリイバラ・シオデ・ヒダカエンレイソウ・
　エンレイソウ・ミヤマエンレイソウ・ナルコユリ・ヤブカ
　ンゾウ

ヤマノイモ科　オニドコロ
アヤメ科　ノハナショウブ・キショウブ・ヒオウギアヤメ
イグサ科　イグサ・コウガイゼキショウ・クサイ・スズメノヤリ・ヌカボシソウ・タチコウガイゼキショウ
ツユクサ科　ツユクサ
イネ科　コヌカグサ・ミヤマヌカボ・スズメノテッポウ・ハルガヤ・カモガヤ・アキメヒシバ・イヌビエ・ハマニンニク・ヒロハウシノケグサ・シラケガヤ・ケカモノハシ・ネズミムギ・ススキ・ヌマガヤ・チカラシバ・オオアワガエリ・キタヨシ・スズメノカタビラ・ナガバグサ・ミヤコザサ・クマイザサ・キンエノコロ・エノコログサ・ハマエノコロ・シバ・タカネノガリヤス・ミゾイチゴツナギ・クサヨシ・カラスムギ・イワノガリヤス・ヒメノガリヤス・ヤマアワ
サトイモ科　コウライテンナンショウ
ミクリ科　エゾミクリ
ガマ科　ガマ
カヤツリグサ科　ヒラギシスゲ・ヒメカンスゲ・オクノカンスゲ・カサスゲ・コウボウムギ・コウボウシバ・オニナルコスゲ・クロハリイ・エゾアブラガヤ・ヒメスゲ・アゼテンツキ・ホタルイ・ヒメシラスゲ
ラン科　ギンラン・アオチドリ・サイハイラン・クマガイソウ・エゾスズラン・オニノヤガラ・コケイラン・ノビネチドリ・クモキリソウ・バクサンチドリ・エゾチドリ・ネジバナ・ホザキイチョウラン・トンボソウ・ササバギンラン・サルメンエビネ

砂原町・現存植生図



鳥類

北海道の鳥の渡りルートを考えるとき、ここ砂原町をぬきにして考えられない。即ち、室蘭市・測量山と渡島支庁管内福島町・白神岬の二点を結ぶ線の真下のほぼ中央に砂原町が位置していることである。このことが砂原町で観察される鳥の種類、あるいは個体数が多いことと関係があると考えられる。

砂原町の自然の中に鳥類層を見ようとするとき、砂原町と駒ケ岳の複雑な地形、海と山が作り出す多様な環境が豊かな地理的特徴を考えなげればならない。

ア、活火山である。イ、独立峰である。ウ、急斜面が多い。エ、河川の規模が小さい。オ、水域が短い。カ、池がない。キ、植林が進み周囲には畑や採草地が俺られている。ク、砂州の上に湿原状の草原がある。

この事が砂原町で観察される野鳥の種数、あるいは個体数が多い事と関係があると思われる。

このようなことから幾つかの鳥類層を見ることができる。

砂原町鳥類目録

アビ目
　アビ科
　　オオハム、シロエリオオハム、ハシジロアビ

カイツブリ目
　カイツブリ科
　　カイツブリ、ハジロカイツブリ、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ

ミズナギドリ目
　アホウドリ科
　　コアホウドリ
　ミズナギドリ
　　ハイイロミズナギドリ、ハシボソミズナギドリ

ペリカン目
　ウ科
　　ウミウ、ヒメウ

コウノトリ目
　サギ科
　　アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、アオサギ
　コウノトリ科
　　コウノトリ

ガンカモ目
　ガンカモ科
　　コクガン、オオハクチョウ、カルガモ、コガモ、トモエガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、シマアジ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、スズガモ、コケワタガモ、クロガモ、ビロードキンクロ、アラナミキンクロ、シノリガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、ウミアイサ、カワアイサ

ワシタカ目
　ワシタカ科
　　ミサゴ、ハチクマ、トビ、オジロワシ、オオワシ、オオタカ、ツミ、ハイタカ、ケアシノスリ、ノスリ、クマタカ、チョウヒ

ウミウ

ハヤブサ科
シロハヤブサ、ハヤブサ、チゴハヤブサ、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウ
キジ目
キジ科
キジ（コウライキジ）
ツル目
ツル科
タンチョウ
クイナ科
クイナ、バン
チドリ目
ミヤコドリ科
ミヤコドリ
チドリ科
コチドリ、イカルチドリ、シロチドリ、メダイチドリ、オオメダイチドリ、ムナグロ、ダイゼン、タゲリ
シギ科
キョウジョシギ、トウネン、ヒバリシギ、ウズラシギ、ハマシギ、サルハマシギ、ミユビシギ、ヘラシギ、エリマキシギ、キリアイ、ツルシギ、アオアシシギ、タカブシギ、キアシシギ、イソシギ、ソリハシシギ、ダイシャクシギ、ホオロクシギ、チュウシャクシギ、ハリモモチュウシャクシギ、コシャクシギ、ヤマシギ、タシギ、オオジシギ
セイタカシギ科
セイタカシギ

シロカモメ

ヒレアシシギ科
アカエリヒレアシシギ
トウゾクカモメ科
トウゾクカモメ
カモメ科
ユリカモメ、セグロカモメ、カナダカモメ、オオセグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、カモメ、ウミネコ、ズグロカモメ、ミツユビカモメ、アジサシ
ウミスズメ科
ウミガラス、ウミスズメ、エトロフウミスズメ、ウトウ
ハト目
ハト科
キジバト、アオバト
ホトトギス目
ホトトギス科
ジュウイチ、カッコウ、ツツドリ、ホトトギス
フクロウ目
フクロウ科
コノハズク、フクロウ
ヨタカ目
ヨタカ科
ヨタカ
アマツバメ目
アマツバメ科
ハリオアマツバメ、アマツバメ
キツツキ目

ハヤブサ

キツツキ科
アリスイ、ヤマゲラ、クマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ
スズメ目
ヒバリ科
ヒバリ、ハマヒバリ
ツバメ科
ショウドウツバメ、ツバメ、イワツバメ
セキレイ科
ツメナガセキレイ、キセキレイ、ハクセキレイ、マミジロタヒバリ、ビンズイ、タヒバリ
ヒヨドリ科
ヒヨドリ
モズ科
モズ、アカモズ、オオモズ、オオカラモズ
レンジャク科
キレンジャク、ヒレンジャク
カワガラス科
カワガラス
ミソサザイ科
ミソサザイ
ヒタキ科
（ツグミ亜科）
コマドリ、コルリ、ルリビタキ、ジョウビタキ、ノビタキ、イソヒヨドリ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、マミチャジナイ、ツグミ

ホオジロ

（ウグイス亜科）
ヤブサメ、ウグイス、エゾセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、メボソムシクイ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キクイタダキ
（ヒキタ亜科）
キビタキ、オオルリ、サメビタキ、エゾビタキ、コサメビタキ
エナガ科
エナガ
シジュウカラ科
ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ
ゴジュウカラ科
ゴジュウカラ
キバシリ科
キバシリ
メジロ科
メジロ
ホオジロ科
ホオジロ、ホオアカ、カシラダカ、ミヤマホオジロ、シマアオジ、アオジ、クロジ、オオジュリン、ツメナガホオジロ、ユキホオジロ
アトリ科
アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ベニヒワ、ハギマシコ、アカマンコ、イスカ、ベニマシコ、ウソ、イカル、シメ
ハタオリドリ科
ニュウナイスズメ、スズメ

ムクドリ科
コムクドリ、ムクドリ
カラス科
カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス
以上　17目　46科（3亜科）　114種

水産動物

砂原町は北海道渡島半島東部、噴火湾南岸に位置し、その周辺海域はそのほとんどが砂泥域で、藻場や岩礁域、タイドプールなどがほとんど無い。また、沖合いの水深も一〇〇メートル以浅で、比較的浅い海が広がっている。一方、砂原町の沖合いを流れる海流は親潮の影響を強く受けるが、夏から秋にかけては対馬暖流を起源とする津軽暖流の影響を受ける。

採集された魚類を分類査定した結果、一七目四七科一一二種が砂原町沿岸海域から記録された。その内訳は軟骨魚類三目三科三種、硬骨魚類は一三目四四科一〇九種であった。以下にそのリストを記す。

軟骨魚綱
ネズミザメ目
ネズミザメ科
ネズミザメ
ツノザメ目
ツノザメ科
アブラツノザメ
エイ目

図1
アブラツノザメ
Squalus acanthias Linnaeus

ガンギエイ科
メガネカスベ
硬骨魚綱
チョウザメ目
チョウザメ科
ダウリアチョウザメ
ウナギ目
アナゴ科
マアナゴ
ニシン目
ニシン科
ウルメイワシ、マイワシ
カタクチイワシ科
カタクチイワシ
サケ目
キュウリウオ科
チカ、キュウリウオ
サケ科
サクラマス、サケ、マスノスケ、サケ属の一種
タラ目
チゴダラ科
エゾイソアイナメ
タラ科
マダラ、コマイ、スケトウタラ
アンコウ目
アンコウ科

図4
ウルメイワシ
Etrumeus teres (DeKay)

キアンコウ
ダツ目
トビウオ科
ホソトビウオ、ツクシトビウオ
サヨリ科
サヨリ
サンマ科
サンマ
マトウダイ目
マトウダイ科
マトウダイ、カガミダイ
トゲウオ目
シワイカナゴ科
シワイカナゴ
クダヤガラ科
クダヤガラ
ヨウジウオ目
ヨウジウオ科
ヨウジウオ
カサゴ目
フサカサゴ科
ヤナギノマイ、エゾメバル、ウスメバル、クロソイ、キツネメバル、シマソイ、ムラソイ
ホウボウ科
カナガシラ
アイナメ科

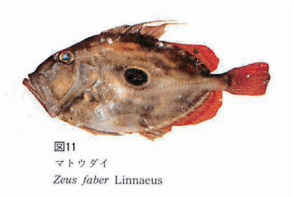


図11
マトウダイ
Zeus faber Linnaeus

ホッケ、クジメ、スジアイナメ、アイナメ、エゾアイナメ
ケムシカジカ科
ケムシカジカ、イソバテング、ホカケアナハゼ
カジカ科
カラフトカジカ、アイカジカ、ツマグロカジカ、オニカジカ、ヨコスジカジカ、オシマオキカジカ、トゲカジカ、オクカジカ、ギスカジカ、ニジカジカ、ベロ
ウラナイカジカ科
ヤギシリカジカ
トクビレ科
トクビレ、オニシャチウオ、シチロウウオ、サブロウ、クマガイウオ
ダンゴウオ科
ホテイウオ
クサウオ科
ビクニン、エゾクサウオ
スズキ目
スズキ科
オオクチイシナギ
アジ科
ブリ、マアジ、イトヒキアジ
シイラ科
シイラ
メジナ科
メジナ
イシダイ科

メジナ
イシダイ科
イシダイ
ボラ科
メナダ属の一種
タウエガジ科
フサギンポ、ナガヅカ、タウエガジ、ムスジガジ、ゴマギンポ、ウナギガジ、ヌイメガジ、ムロランギンポ、ハナジロガジ、オキカズナギ、ガジ
ニシキギンポ科
タケギンポ、ハコダテギンポ
オオカミウオ科
オオカミウオ
ボウズギンポ科
ボウズギンポ
ハタハタ科
ハタハタ
イカナゴ科
イカナゴ
ネズッポ科
セトヌメリ
サバ科
マサバ、クロマグロ
イボダイ科
イボダイ属の一種
カレイ目

図34
ハタハタ
Arctoscopus japonicus (Steindachner)

ヒラメ科
ヒラメ
カレイ科
サメガレイ、ババガレイ、マツカワ、アブラガレイ、ムシガレイ、ウロコメガレイ、ソウハチ、アカガレイ、ヒレグロ、イシガレイ、スナガレイ、クロガシラガレイ、アサバガレイ、マガレイ
フグ目
カワハギ科
ウマズラハギ
フグ科
マフグ、トラフグ、ゴマフグ

海藻

渡島半島の海流と海藻の関係は一般的に次のようになる。日本海沿岸は対馬暖流のみの影響を受けるため、暖流特有の海藻が生育する。津軽海峡へ入ると、白神岬から函館山辺りまでは殆ど暖流種のみであるが、函館山から恵山岬にかけては寒流が入り込むため、寒流種が屋立ってくる。すなわち、この海峡は白神岬から恵山岬にかけて暖流種から寒流種へ順次置き換わる海域である。恵山岬からは寒流種が一段と多くなり、砂原を通り室蘭、襟裳郷まで行くと完全な寒流海域になる。砂原の海藻から判断すると、当地は寒流八〇パーセント、暖流二〇パーセントぐらいの割合であろうか。

砂原の海に八六種の海藻を確認することができた。しかし、

この地に当然生育しているはずの海藻で、見つけることができなかった種もある。将来の調査で種類はかなり増えると思うが、その機会に追加していただきたい。

紅藻

ウシケノリ目

ウシケノリ科

ウシケノリ、オオノノリ、ウップルイノリ、ブイリタサ、スサビノリ

ウミゾウメン目

カギケノリ科

カギノリ

ウミゾウメン科

ウミソウメン

テングサ目

テングサ科

マクサ

サンゴモ目

イソキリ、ヤハズシコロ、ピリヒバ

カクレイト目

リュウモンソウ科

ヘラリュウモン、アカバ

フノリ科

フクロフノリ

ムカデノリ科

マツノリ、カタノリ、ヒラムカデ

ツカサノリ科

クロトサカモドキ

カレキグサ科

カレキグサ

スギノリ目

イソモッカ科

イソダンツウ

スギノリ科

ツノマタ、ヒラコトジ、エゾツノマタ（クロハギンナンソウ）、アカバギンナンソウ

イボノリ科

イボノリ

オキツノリ科

オキツノリ

ベニスナゴ科

ベニスナゴ

ダルス目

ダルス科

ダルス

マサゴシバリ目

ワツナギソウ科

コスジフシツナギ

マサゴシバリ科

アナダルス

イギス目

イギス科

フタツガサネ、トゲイギス、イギス、クシベニヒバ

ダジア科
シマダジア
コノハノリ科
ハイウスバノリ、ヌメハノリ、スズシロノリ
フジマツモ科
ユナ、ウラソゾ、フジマツモ、ハケサキノコギリヒバ、モロイトグサ、ショウジョウケノリ、イソムラサキ
褐藻
イソガワラ目
イソガワラ科
マツモ
ナガマツモ目
ナガマツモ科
ナガマツモ、クロモ
ネバリモ科
ネバリモ
カヤモノリ目
カヤモノリ科
ワタモ、フクロノリ、セイヨウハバノリ、カヤモノリ
ウイキョウモ目
キタイワヒゲ
エゾブクロ科
エゾブクロ
ハバモドキ科
ハバモドキ
ウルシグサ目
ウルシグサ科
ウルシグサ、ケウルシグサ
コンブ目
チガイソ科
チガイソ、ワカメ
ツルモ科
ツルモ
コンブ科
アナメ、スジメ、ガゴメ、ミツイシコンブ、マコンブ
アミジグサ目
アミジグサ科
エゾヤハズ、アミジグサ
ヒバマタ目
ウガノモク
ヒバマタ科
エゾイシゲ
ホシダワラ科
フシスジモク、アカモク、ウミトラノオ
緑藻
ヒビミドロ目
ヒビミドロ科
ミビミドロ
アオサ目
モツキヒトエグサ科
モツキヒトエ
ミル科

ミル
海産植物（海草）
スガモ

戸口

戸口の推移　家の増減や人口の増減は、まさに町村の繁栄や殷賑、過疎や衰退を測るバロメーターであるともいえる。隣りの鹿部町の開村は、元和元年（一六一五）に南部の国、下北の司馬宇兵衛が漁業のため十数戸が移住して開村したと伝えられている。茅部郡下各町村の起源は、ともに同じく明治14年の「茅部山越二郡各村沿革誌」に據るものである。

新羅之記録や松前年歴捷径に、寛永十七年（一六四〇）六月一三日内浦岳（駒ケ岳）の噴火による大津波が起こり、昆布採りの舟百餘隻、夷人など多く溺死したという。この記録から、当時、寛永年間、一七世紀の初めには昆布採りのために入稼ぎに来ていた和人の人達が多くのアイヌの人たちと住んでいたことを伝えている。

寛文年間（一六六一～一六七三）には、遊行僧円空が松前地や桧山や六箇場所の村むらを旅していた。円空らの旅の僧が巡回していくまでに、和人が広く内浦湾岸の寒村に広く移り住んでいたのである。

箱館から東海岸沿い小安・戸井から尾札部・砂原・落部・野田追までの六箇場所は昆布の生産を大きな原動力として入稼ぎや移住が増加したのは元禄期（一六八八～一七〇四）であるといわれている。

そして宝暦（一七五一）から天明（一七八一）頃には東蝦夷地六箇場所でも鱈漁が地元の主産業となり、漸次戸口が増加してくる。

寛政期（一七九〇）のはじめに郷土を訪れた菅江真澄は、松前から箱館へ、そこからアイヌの小舟で村から村へ送られ、鹿部から山越えそして砂原に来て「はじめて和人の村に来たようだ」と異郷の地で同胞に会ったように和みくつろいだ気持になったと「えそのてぶり」に記している。この頃郷土砂原の和人の戸口は、六箇場所の中で最も栄えていたのである。

砂原の戸口のうつり変わり

町や村の入口や戸数の増減は、その町村の経済文化の動きを知る大事な指針である。郷土砂原の起源は、明治14年に戸長役場から郡長に報告した沿革書に接って、初めて記録された例が殆どである。砂原町の先駆は、津軽国（青森県）蟹田村の権四郎という人が、天文元年（一五三二）鰊漁のため春季に二、三十人の漁夫と砂原に来住したのが先駆（開基）としている。のち元亀二年（一五七一）三十余戸の永住者があり、一村の姿となったと報告されたのを今まで踏襲して伝えられてきた。子孫の系譜も足跡も墓碑や記録も史実として確かめられない。

文化四年（一八〇七）松前三ケ所東西村調に「砂原村　八六軒　三八九人、嘉永七年（一八五四）六箇場所書上には「砂原村　家数九六軒　人別五〇二人　掛り澗村　家数三五軒　人別二二七人」

明治・大正の戸口

北海道立文書館に開治3年の掛澗村の宗門人別帳が所蔵されている。明治5年の戸籍法作成の蝦前は、神社仏閣などで村人

の宗門人別帳が住民の居住の何よりの証明だった。

地名の由来

地名のうつり変わり

茅部は駒ケ岳のアイヌ語地名カヤベヌプリで、明治2年、茅部郡の郡名として用いられた。古くから砂原地方を茅部とよんでいた。

森町にも本茅部があるが、アイヌ語ポンカヤベに似ている。

町内の地名はアイヌ語の地名が多い。和人が来住してから付けられた地名は、日本語の意味や人の名前などでわかりやすい。

古い地名を年代順に記すと、寛政年間の菅江真澄の「えぞのてぶり」に表記されるもののほか、列記してその変遷をみる。

明治になり、戸籍の事務が取り扱われると、それまで思い思いに力タカナ、ひらがな、漢字を当てていた郷土の地名に、共通の表記が求められてきた。

明治11年、地券が発行されるといっそう公的な地名の表記化が進む。

地名　町名　砂原の由来

92町勢要覧の町名由来には「大昔、砂原の低地一体は、アイヌの家屋材料として用いられた鬼茅（おにがや）や葭（よし）が繁茂していたのでサラキウシ（鬼茅のある所の意）と呼ばれ、これがサラキ→シャラキ→シャワラと訛（なま）り、砂原の文字を当てたといわれている。」と記されている。

町史の編集記述に当たってものごとの起原や変遷（うつりかわり）を確かめるという大きな任務がある。

前書や類似書を安易に引き写す（孫引き）は、大きな誤まりを招くことが多い。

昭和55年小林露竹編集の砂原町沿革史年表には、西暦二五〇年砂原の地名起こる。（アイヌ語サラキウシ）サラキ（鬼茅）ウシ（のある所）＝茅草のある所の意。このサラキがシャラキとなり、後に和人が入ってシャラキがシャワラと訛り、ウシを略してシャワラ＝サワラとなった。大昔砂原低地一帯は、大きな茅（鬼茅）や葭が繁茂してアイヌ人の家屋材料となった。これが生活上大そう喜びであったから地名ともなったのである。（他にシャラ広い砂州説もあるが、今日サラキ説が定説となった。更科源蔵・永囲方正説）※本文ヨコ書

この小林年表の地名由来の文を町勢要覧に要約していることは明白である。大事なことは、小林年表で地名の起こりを西暦二五〇年としていることである。

アイヌの歴史には記録がなく、北海道の和人の歴史にしても、一一、二世紀にならないと和人は歴史に登場してこないことから疑義がある。歴史は古いほど立派なのでないから、史実を確かめて、事実を記し、後世に伝えることが大事だと思う。

天明寛政の頃、各地の風物民族を尋ねて書きのこした菅江真澄（すがえますみ）は、寛政三年（一七九一）松前から有珠への旅の記録を「えそのてぶり」に記し砂原の地名についてふれて『むかし弱檜（さわら）の磯山にありし名にや、砂埼（さき）のあれば砂原てふ名あるけるにや。サハラちふ夷辞にや」と記し、三つの地名語源にゆれている。

文政七年（一八二四）幕吏上原熊次郎は蝦夷地名考并里程記（ならびに）（正式の書名は写真）に「シャラなり、顕ると訳す。高山にて所々より熊の顕れ見ゆるゆえこの名ある哉。未詳（まだかならず）」と記してい

る。

上原熊次郎は、よくアイヌの古老からその地の地名由来を聞き書きした人である。

明治14年、村々の戸長役場から開拓使函館支庁へ報告した村の沿革をまとめた一書、茅部山越二郡各村沿革誌（北海道大学図書館所蔵）に「砂原村ノ儀ハ嚢日、椹大樹アルヲ以テ砂原ト称シ」と寛政期の真澄と同義を砂原の地名由来であると報告している。

大正2年（一九一三）初めての砂原村郷土誌は、「今ノ沼尻二椹ノ老樹アリ」と明治の沿革誌の椹説を記し大正7年（一九一八）函館支庁管内町村誌「第二十二章　砂原村」も椹説を踏襲している。

六箇場所サワラ場所

郷土砂原が、松前藩士北見常五郎の知行所サワラ場所となったのは、七世紀中期で代々北見家の知行地だった。

寛政期の頃の松前国中記に支配地はマツヤ崎を境界に、字ノホリ崎・カヤベ・ニコリカナ。井シクラ

産物　緋干鱈　鱒　瓢納將　鮭　昆布

明治24年、永田方正の北海道蝦夷語地名解は、蝦夷管窮や寛政一一年（一七九九）蝦夷紀行、弘前蝦夷志に據ってアイヌ語サラキ（鬼茅）説を採用した。これをうけたのが昭和2年砂原村勢一班にサラキ説が登場し、以来、今日までの町名由来として知られている。

アイヌ出身の北大教授だった知里真志保は、アイヌ語入門や地名アイヌ語小辞典などで類書の誤りを解明している。地名についてアイヌ語説、椹説、砂原説などなど地名書を漁ると混迷が深まるばかりである。東北北海道のアイヌ語地名を調査研究し集大成した山田秀三は、北海道の地名に「もしかしたらサラ葭原だったかもしれない。分からない地名である。」と結んでいる。

町名砂原の起源を解く文献資料（書籍）を次に挙げる。

・国鉄「北海道駅名の起源」昭和25年改訂　渡島砂原駅（おしまさわら）開駅　昭和20年6月1日

起源　アイヌ語「シャラ」（広い砂州）から出たもので他に同名の駅があるので、国名を冠したのでかる。

編集同人は北海道史や地名の権威である高倉新一郎・知里真志保・更科源蔵で、昭和29年版から河野広道が同人に加わった豪華な編集人が一層親しまれ十六版を重ねている。

・ＮＨＫ北海道本部「北海道地名誌」昭和50年発行

砂原　古文書によるとサラキとある。サラキはアイヌ語のサルキで葦のことで、おそらくサルキ・ウシ（葦原）の略から出たものと思われる。この地名誌には砂原町の山岳・河川沢・岬崎・字名町画名が詳細に解読されている。引用や調査の方法などについては、放送取材という広い情報網をもっていた結果かもしれないが地元にも確かめようのない内容が多い気がする。

・三省堂　北海道地名小辞典　昭和53年

さわら　砂原　地名はアイヌ語シャラ　やや広い砂州に由来。駒ケ岳（一、二二三メートル）北麓にある（横書き）

・昭和55年版　北海道市町村行政区画便覧　北海道行政協会編

砂原とはアイヌ語シャラ（やや広い砂州の意）から出たものである。

・北海道大百科辞典　上・下　昭和56年発行

大百科の地名の多くは、山田秀三（東北・北海道のアイヌ語地名研究者）が執筆。前号の山田文献と重複するが新企画の編集本なので大百科事典の全文を転載する。

「砂原はアイヌ語による。上原熊次郎はシャラ顕（あらわれ）ると訳す。高山にて所によりよく顕る見ゆるゆえ此名あるか。未詳。」と書いたが上原も自信がない解だったらしい。永田方正の北海道蝦夷地名解は、サラキ鬼茅（おによし）。

天明・寛政の旧記にサラキとあるに従う。またサラは尾なり。駒ヶ岳噴火の時、此沙尾を為す。」と二説を書いた。

砂原をサラキ葭とも呼ばれていたのだったらサラ葭原と解すべきであろう。

北海道が蝦夷地の頃の古地図に郷土の地名が記されている。元禄時代、松前藩から幕府に提出した御国絵図と同じ古地図である。

松前蝦夷図　享保三年（一七一八）　大東急記念文庫蔵

えさんの崎　小舟ノ間アリ　此浜通昆布（とおりこんぶ）アリ　おさつへ　此浜通りこんぶ有り　ながはま　はまつゞき遠浅

うすしり　つくのへ　かやへ　おとしつへ　此間おっとせい有　のたおい　ゆらっふ

砂原の古名はカヤベ

明治14年の茅部山越二郡各村沿革誌に

（砂原村）湾沿（わんえん）ノ地方ヲ茅部灘ト唱ヒ又（また）六ヶ場所と云ヘシ古称アリ（略）砂原村ヨリ以西落部迄ノ間ニ茅部ノ一称アリ。砂原村ヲ本村トシ、今ノ落部村支茂無部川境マテ支配（略）

カヤベはアイヌ語帆の形した駒ケ岳（内浦岳）の山名だった。

砂原村は、昔から駒ヶ岳の山容を背景にした土地であり、砂原岳の一称を附すように砂原の山、郷土の山であり、山の名が土地の名として自然ともいえる。町名の起源は、町史の大きな課題でもある。

現行の字名の由来

地名は土地の歴史そのものといわれる。字名は、より身近かな成り立ちから名付けられたものである。東北・北海道には、アイヌ語地名が多い。万延元年、松浦武四郎が調整した北海道の古地図は、字名（支村（えんだむら））を詳しくまとめた貴重な地図である。

郷土の部分をみると「ヲシタシ（押出）・マツヤサキ（松屋崎）・明神（みょうじん）・ヌマシリ（沼尻）・スナサキ（砂崎）・ヒコマ（彦澗）・砂原・モンヘサハラ（紋兵ェ砂原）・カ、リマ（掛澗）」が記されている。

村名と字名の沿革

明治2年に開拓使が設置され、蝦夷地は北海道と改められた。8月15日、また道内を一一国八六郡に画定した。9月、箱館を函館とする。

明治4年4月、亀田郡・上磯郡・茅部郡所属の村落五十七を定めた。明治6年、大小区を定めて戸長・副戸長・村用掛をおいた。明治13年1月、村に戸長役場を開設。砂原村掛澗村二ヶ村戸長役場が置かれた。

明治19年3月、北海道庁を開庁。12月登記所をおいて地券制度から土地登記台帳に改めることにより、町村の字名がようやく固定化し、明治39年4月二級町村制の施行により砂原村と掛澗村は二級町村砂原村となり、それぞれ大字砂原村と大字掛澗村とし小字名と地番はそのまま用いた。昭和45年9月1日、町

制施行により大字を廃止して砂原村の字名を継承した。
明治39年二級町村制施行以来、大正、昭和の戦前・戦後を通じ全国的にも市町村合併や町名字名地番改正の行政指導が繰り返しおこなわれ、道内の町村の多くは、町村合併や町名字名地番改正が行なわれた例が多い。

「地名は文化財である」

砂原町の字名地番が、時代の波をのりこえて生き残ってきたのは稀れな例であり、自治体のあり方として貴重な事例である。十八字の由来を次に略記する。

相泊　アイは北風のこと。トマリは舟掛りのところの意。
ニッ山　海上から二つの山の姿が見える。（落合早苗翁談）
沼尻　砂崎の湿原（沼）の東の端の地域の意。
八島渡　沼尻・砂崎の湿原の山側を飛び石のように渡った。
砂崎　海流によって長い年月砂洲が突き出ていく崎の地。
砂原原野四線～八線
砂原原野　一二線　明治20年以後、牧野の払下げによって拓かれた地域。
砂原（町村名の由来に同じ）
彦澗　海岸線が凹んで澗掛りのよいところ。漢字は当て字。
会所町　松前藩のとき運上屋、寛政以後は会所の置かれた所。
四軒町　村のはじめに家が四軒あった所。
紋兵ェ砂原　昔、紋兵ェという人が住んでいた所。
度杭崎・掛澗度杭崎　ドグイはドンゲ、虎丈の繁茂の地。
長瀬崎　海底に長い瀬があるところ。
場中　掛澗漁場の中央の意。
小石崎　海岸に小石の多い所。
押出　噴火の泥流が押し出されたところ。

砂原町の字名ほ、ほとんど和人地名（日本語）である。

大正七年　砂原村郷土誌　第三章　制度『部落ノ由來』に

大字砂原村
字紋兵ェ砂原　紋兵エナルモノ創メテ此部落ヲ開拓セルニヨル
字四軒町　今ヲ去ル三百年戸敷四戸アリシニヨル
字會所町　昔時會所ノ所在地ナルニヨル
字彦澗　元噴火湾ノ入江海ナルモ二百五十年前海水の作用ニヨリ陸地二化シ名ヅケテ　ヒコシマト云ヒタリト云フヒコシマ略サレテヒコマトナリシナラン
現今彦澗東端ノ沼ハモト海ナリシ事明ナリ
字沼尻　彦澗ノ東端ニ沼アリ其後ニ処スル部落ナルニヨル
字相泊　本村ノ東端乃チ噴火湾ノ入口ニ障壁トナリ斗出シアイノ風（子丑ノ風）此処ニ止マルト云フ
大字掛澗村
字度杭崎（一名長瀬嵜）
イタドリ（草ノ名）ノ繁茂セル所ナルニヨル（イタドリヲ俗ニドグイト呼ブ）
字長瀬嵜　地崎、瀬長ク亘リ故二長瀬嵜ト云フ　二者何レガ適當ナルカ
字場中　漁場ノ中央ナルニ由ル
字小石崎　小石多カリシニ依ル
字押出　駒ヶ岳噴火ノ際泥土押出コノト部落ヲナンタルニヨル

砂原町の地名

地名は郷土の大地や山・川・海などの自然と人々のかかわり

の中で名付けられて生れたものである。
人々が土地とかかわった歴史的事柄から名付けられた地名、もっとも多い地名は土地の形状や風土自然現象などから名付けられたものである。
その土地と関係した時の人の人名がそのまま地名として呼ばれるものである。地名はうつりかわることが多いのでその土地の歴史そのものであることから「地名は文化財である」として地名の変遷は歴史の研究に大きな役わりをもつ。

古代のようす

渡島半島は北海道の南西部に位置している。日本列島の北に広大な土地が広がる北海道は島であり、地理的な条件が固有な歴史文化を築き上げてきた。津軽海峡によって隔てられた南の渡島半島と本州の津軽・下北半島、宗谷海峡による北のサハリン（樺太）、根室海峡による北東の千島列島、歴史文化を考えるとき海峡を超えた地域との関係もあるが、北海道は中央部に南北に屋根のように走る日高山脈、夕張山地、天塩山地によって東西に二分しているが、先史の時代でも東側と西側に違いが認められている。南北に縦走する尾根の西側に北の石狩平野から南の勇払平野へと低地帯が連続して、帯状の平野が北の海から南の海を結び、その西の羊蹄山・恵庭岳、ニセコアンヌプリ、余別岳など山岳地帯に続いて渡島半島がある。この半島の東の大きな懐にあたる内浦湾の南岸に砂原町と駒ヶ岳があり、北海道南西部の先史、旧石器時代は現在の地形がほぼ形成された頃から人間が住むようになっていった。

北海道にいつから人間が住むようになったかという問題がある。それは石器を主な道具として使用した旧石器の時代で、旧石器時代遺跡は日本列島の北から南まで発見されているが、それぞれの地域で発見されている石器にほ時代と石器製作の技法に特徴があって、北海道では道東北地方と道南西部の渡島半島では共通しながら地域的な特色がみられる。この石器が主な道具の時代から次は土で容器が作られた土器時代に移る。一般に縄文土器の時代、縄文時代と呼ぶが、初期の土器は縄による文様が無かった。文様や器形の変化は、時期や地域で多少違っているが、土器が出現してから縄文土器が終るまでの時代を普通早期、前期、中期、後期、晩期に五期分している。縄文文化が全国的に続いて稲作農耕文化と青銅器の文化になる弥生文化の時代となるが、北海道では稲作文化も青銅器の文化も南から伝えられることなく、新しい文化の時代へと移っていった。海獣狩猟文化を発展させた北日本特有の続縄文文化である。日本では弥生文化から古墳文化の時代となるが、続縄文文化は弥生文化の時代から古墳文化の時代にまで続いた。東北地方では古墳文化が伝播して後期古墳が築造されるが、青森では古墳終末期になってから末期古墳が造られる。この築造形式は畿内や関東と違うもので、辺境の古墳文化ともいえる。北海道特有の続縄文文化の時代を大きく前期、中期、後期に三時期区分したが、続縄文文化中期後半になると北の文化が南下して新潟や宮城県にまで分布する。日本列島の弥生文化と古墳文化は南から北進した文化であるが、続縄文文化は北から南に進出した文化である。吉墳文化は稲作による土地権力と鉄器による豪族の交配社会で、律令制へと発展するが、海の狩猟文化を生活基礎とした

続縄文人は、古墳社会の鉄文化を求めたものか実体がわからないまでも、続縄文人の南進は北日本の問題となっている。続縄文時代は、古墳文化の終末である七世紀頃まで続いた。七世紀になると続日本紀などに東北地方で蝦夷という字がみられるようになる。〝エミシ〟と読むが、東北や北海道は蝦夷の世界であった。蝦夷の解釈に渡島蝦夷の字が記録にみえるが、これが東北地方北部の蝦夷なのか北海道の南部まで含まれるのか判然としない。古文献でさだかでない時期の考古学では、土器形式の土師器（はじき）の編年が確立している。考古学では蝦夷という表現をしていないが、東北地方北部では十二世紀にいたる古代の土器組成と住居・集落が明らかになっている。北海道で古代とする時代区分が適当であるかどうか。古代とは概念的に律令制による社会ということになるが、宮城県の多賀城、秋田県の秋田城と柵跡から制度として青森や秋田、岩手両県の北部には城柵が築かれたことがなく、律令政府の直接支配が及ばなかったと考えられている。東北地方の人達は蝦夷であった。七世紀から十二世紀までの奈良から平安時代の北海道はどうであったか。東北地方の土師器に似た器形と技法をもつ土器群がある。土師器の成形技法をもつ擦痕が器面にみられるが、土師器に文様がほとんど無いのに北海道の土器は沈線や刻線文のある土器で、擦文土器と呼ばれる。全道的に分布して東北地方北部の住居構造に似て方形の竪穴住居にカマドや煙出しの煙道が作られていて、住居が集まった集落を形成している。集落は海岸や河川流域にみられ、アワ・ヒエの農耕や鉄器が使用されている。この擦文文化の時代が続縄文時代に続く擦文時代である。この土器は青森県では九世紀になって出土し、十一世紀になるとおびただしく多くなる。擦文文化の時枕が何時頃終ったかについては、十二世紀と考える人、十三世紀と考える人もいるが、室町時代の十五世紀になると青森県北津軽郡の五所川原古窯群で焼かれた硬質の陶器である須恵器や石川県能登の珠州窯で焼かれた須恵器が北海道に渡来するようになり、木製容器が土器に代り、土器時代が終りを告げる。前アイヌ期である。記録には蝦夷とあるが、考古学からみた北海道は、縄文時代のあとに続縄文時代、擦文時代となって本州とは違った様相を示している。アイヌ期とは何時なのか。入類学・民族学が発展してから〝アイヌ〟と呼ばれるようになる。学史的には明治一〇（一八七七）年以降であり、それ以前を前アイヌ期とする。

地理的遺跡の立地

砂原町の西に隣接する森町には縄文時代からアイヌ期までの遺跡がある。森町も駒ヶ岳火山噴出物が流入したり降灰の被害を受けた地域であるが、砂原町ほど直撃を被ることはなかった。地質学的に砂原町と駒ヶ岳の活動が自然の項目で述べられているが、砂原町という限られた地域での遺跡が存在する可能性を地理な立地環境からみてみたい。遺跡が存在する可能性はすでに三十年も前に調査したことがある。段丘面と平坦地形を調査の対象とした。いまとは状況が違うのは、当時は戦後で畑を耕して自給の時代であった。火山灰土壌でも黒色土を掘り出していることもあり、火山灰を取り除いている所もあった。畑には雑草がなく、掛澗から渡島砂原の間の丘陵で数片の縄文土器を採集したことがあった。町史執筆のため再び河川流域と段丘面を調べたが当時の畑は宅地などの造成地か荒地となって遺跡の発見が難しかった。森町では尾白内川流域の川口に近く東西に

細長く伸びる低い丘陵に尾白内貝塚がある。細く伸びる丘陵に林があって丘陵の西に約二メートルの火山礫と火山砂が堆積している地層断面があった。その下属には一メートルからの黒色土層上層に平安時代の須恵器が出土して主体部が続縄文時代前期の遺跡であった。その後道路の拡張工事で調査したところ縄文時代の終末期の遺物が出土している。さらに西の中川の川口に近いニナ層段丘の北側に森川貝塚があり、四十センチほどの火山礫と火山砂の下に室町時代初期から続縄文前期の遺物が出土する森川貝塚がある。森川の川口近くから南の二十メートルから四十メートルの段丘には縄文時代の遺跡があり、上流域にある姫川駅に近い七十五メートルの段丘にも縄文時代の遺跡がある。このように段丘上の遺跡は鳥崎地区へと続いている。

周辺地域の遺跡立地から砂原町には縄文時代からアイ期の遺跡が火山礫や火山灰の下に眠っていることは間違いなく、砂崎から沼尻の海岸で段丘の露頭がある海岸保全地帯を踏査した。表土の下に堆積する火山灰と火山砂は五十センチから七十センチの厚さで、その下部に六十センチから九十センチの黒色土層が続いている。この黒色土層から続縄文前期と縄文晩期終末、縄文後期後半から縄文中期末の土器片が検出でき、砂原町に遺跡があることを確認できた。これはほんの一部の地域でしかないが縄文時代からアイヌ期にいたる遺跡が埋蔵されている可能性が証明されたといえる。

二ッ山遺跡

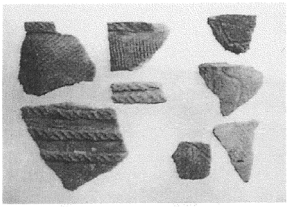
砂原町の先史時代遺跡として登録されているのがニツ山遺跡である。登録台帳の市町村記号番号B―14、渡島支庁砂原町、登録番号2、貝塚、二ッ山遺跡、所在地は字二ッ山二―一、二―二、二―三とある。

内浦湾の南海岸で貝塚が発見されたということは非常に珍らしいことであった。森町の尾白内貝塚が昭和二十四年に尾白内中学校の学生によって発見され、翌年から東京大学の駒井和愛博士によって発掘が開始されたが、砂原町の沼尻での貝塚は予想されなかっただけに驚きであり、自然貝層のこともあるので調査することにした。昭和三十八年のことである。当時の調査日記と昨年改めて遺跡確認調査した結果を参考に報告しておきたい。この遺跡が大規模な遺跡で、貝塚がその一部であることがわかった。

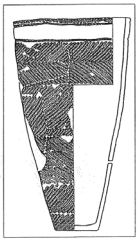
貝塚の発見は、昭和三六年七月頃で沼尻中学の二年吉田実君といわれる。昭和三八年二月二三日に函館で渡島管内小中学校社会科研究会で〝渡島半島の考古学について〟という話をしたとき、沼尻小学校の辻務教諭から沼尻にも貝塚があると聞き四月一日に現地調査をした。調査は辻務先生の案内で読売新聞社の大内貞夫記者と国学院大学学生岡田一彦氏が同行した。遺跡は当時砂原村字砂崎十八番で道有林鹿部事業区一林班と小班内にあった。このことは文化財保護法による土地所有者への遺跡通知で七月一九日付函林第四〇二号、函館林務署長諸留保の文書でわかった。この土地は放牧地で砂原開拓農協縄合長水木勇蔵との契約、昭和三八年四月一日から三九年三月三一日、有料貸付地でもあった。遺跡発見届は発見日四月一日、四月五日付で文化財保護委員会宛に提出した。六月一一日遺跡の地層調査を行うが沼尻中学校の花田耕一先生が同行された。砂原村教育長からの連絡もあって七月一六日に関係者立会の上で現地説明会を行った。

二ッ山貝塚の位置確認調査を行ったのは昨年六月二〇日である。五年ほど前にも遺跡を訪れたが、放牧地であった当時は沢の状態もはっきりして湧水が貝層の下から流れてあたりに貝塚が散っていたのですぐに貝塚の位置がわかったのに地点がわからない。貝塚地点がわかったのは、何度か一帯を調べてからである。それほど丘陵に灌木が茂ったのと沢の様子も変っていた。沢にはほとんど貝塚も散在していなかった。沢の幅も広くなっていたような気がする。位置確認の発掘地点は東ノ沢を百五十メートルほど上った西斜面である。沢近くに上から崩れた黒土にタマキビやイガイの破片と土器片があった。貝塚発見当時の地層図はあるが、現在の状況を調べるためにも試掘が必要であった。試掘は丘の上部から沢にかけて幅一メートル、長さ五メートルの試掘区を設定して調べたが、この地点では貝層を掘って埋めてもどしたときの攪乱層があった。残存するわずかの貝層から比較的大きな鳥の大腿骨、尺骨、魚の下顎、鹿角を縦に加工した残片、ヒメエゾボラ、タマキビを採集することができた。丘の上部に近い黒色土層では自然石の配石から余市式土器の破片が出土し、沈線文のある縄文後期の土器片が出土した。表土、火山灰と小さな火山礫を含む層の下四十八センチの黒色土に遺物が含まれていた。

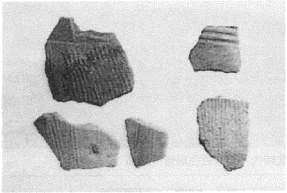
地層的には海岸保全地区の遺物包含層と変わりなかった。



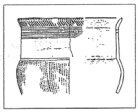
海岸保全沼尻・砂崎地区
縄文中期後半と後期の土器



八雲コタン温泉遺跡の深鉢土器
八雲町教育委員会

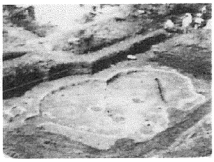


海岸保全沼尻・砂崎地区
続縄文前期の土器

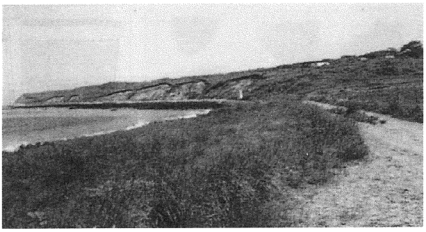


森町尾白内貝塚の甕形土器
森町教育委員会

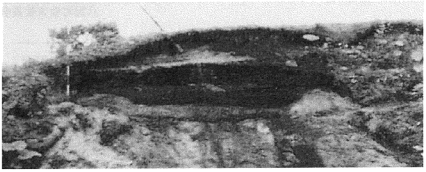
縄文後期の配石遺構
南茅部町大船遺跡



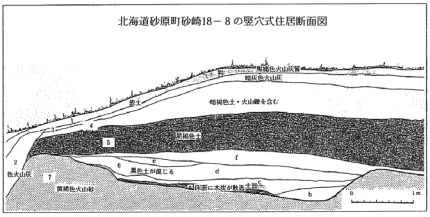
縄文中期末の竪穴式住居跡
函館煉瓦台貝塚



沼尻・砂崎地区遺跡の遠景



縄文時代・竪穴式住居後の断面



竪穴式住居断面の実測図

砂原町民憲章

昭和55年11月22日
砂原町長　新　谷　一　男

砂原町民憲章（昭和55年11月22日制定）

わたくしたちは　秀蜂駒ケ岳を仰ぎ　幸多い
内浦の　海と　緑と　太陽　に恵まれた砂原町
の町民です。
　わたくしたちは　先人の心と汗をうけつぎ
責任と自覚をもって　豊かで明るい町をつくるため
この憲章を定めます。

一、互いに話し合い、温かい家庭の育つ
　　平和な町にしましょう。
一、元気に働き、産業の盛んな
　　豊かな町にしましょう。
一、スポーツに親しみ、心身をきたえ
　　健康な町にしましょう。
一、きまりを守り、健全で住みよく
　　明るい町にしましょう。
一、郷土を愛し、教養と文化を高め
　　美しい町にしましょう。

内容の詳細については砂原町史の本編をご参照ください。